

夏季福音特別集会 第3回

十字架・聖霊の主キリストの中へ

2018年8月25日 (京都KKRくに荘)

奥田 昌道

神の絶対次元 聖霊のパプテスマ 詩篇103篇を成就したのがイエス 祈りとは信入・婦入・祈入  
死生の転換 パウロの私への預言 祈りの土台はイエスの十字架 イエスは祈りの人 「主の祈り」  
求めの切なるによりて 気落ちせずして常に祈る 砕けの心 まず神の国と神の義を 汝ら  
我に居りわが言汝らに居らば 祈りて願う事は既に得たりと信ぜよ ドイツ語の先生は幸せ 神  
の次元とこの世の論理の違い 祈りたることは既に聴かれたとせよ 祈り

● 神の絶対次元

第3回集会は祈祷会です。朝も既にここで祈り会をやりました。朝の祈り会で私が開いた箇所は詩篇の103篇。旧約の福音というところ。あの詩篇103篇は、それから詩篇全体が祈りの書ですよ。詩篇というのは祈りと讃美なんです。「プサルム」(詩篇)は讃美であり祈りです。どちらかというところ、こちらからの祈りです。神さまの呼びかけにこっちから祈っていく姿勢が強い。

それが今度は、福音書、キリストにきますと、向こうから迫ってくる。向こうから迫ってくるときに、

「はいっ、ありがとうございます」

と、こっちは受け皿になる。新約の福音の世界は、向こうからくるものを、迫りくるものを受けとって、それに「はい、ありがとうございます」と応える。これが私は福音の事象だと思ふ。

詩篇の時代は、ダビデの頃でしょ、こっちから呼びかけてつかみかかって、「主よ！」と本当に叫びかかる。その面も我々には大事なんです。

「雨が降るのを待っています  
ではなくて、

「雨よ、降らせてたまえー!」

と呼びかかる。雨が降ってくれないと、こっちは受けられない。でも、  
「そのうちに降るでしょうから、のんびり構えていますわ」  
なんていうのではなくて、

「主よ、雨を降らせてたまえー!」

と。そうしたら、雲がわいてきて雨が降ってくるという——旧約聖書にもそういう場面も出てきますけれども——なにかそういう本当に白熱の魂、そういう世界。これが詩篇であり、



また新約の祈りの世界です。

イエスは一人さびしい所で祈っておられた。人知れず起きて祈りに出かけておられた。イエス・キリストさまでさえ、そうやって祈っていらっしやる。

「イエスは祈りのひとである」

と、小池先生は言われました。なによりもイエスは祈りのひとである。十二弟子を選ぶときは徹夜で祈られた。徹夜で祈った祈りの結果は、ユダが含まれていた。あんなのは初めから外しておけばいいのにと、ぼくらは思うでしょ。人選のあやまりです。でも、それも全部含めてやはり御意だったんでしょかね。ユダがいなかったら、十字架は出てこないもの。みんながいい子だったら、十字架はなくて、そのままイエスさまは天国へ行ってしまうかもしれない。ユダはイエスを十字架につける功労者かもしれない。それだけではない。みんなユダ性を持っているんですよ。みんなユダの心がある。それをもキリストは受け入れて執り成して、

「父よ、彼らをゆるしたまえ。彼らはやっていることがわからないのです」

と。あの執り成しの祈りはなにもユダのためだけではない。我々の中に存在しているユダ性、裏切りの性質、そういう肉の思い、これを全部キリストは十字架で片づけてくださった。それも背負ってくださった。十字架は一切を片づけているんです。

「こんな自分はダメです」

とか、絶対に言わせない。「絶対」というのはそういうものです。

我々は「相対」の世界に生きている。相対というのは、相手の出方によってこっちも変わります。これが相対です。向こうが恵み深かったら、こっちも恵み深くやります。向こうがいどんできたら、こっちは仕返しをやります。そういう、相手の出方でこっちは全部変わる世界。これが我々の生きている社会でしょ。

キリストは絶対なんです。相手が何であろうと、愛を貫く。相手が背けば、その背きを自分は引き受けて執り成す。ケタが違う、本当に次元が違う。つまり、神の次元、愛の次元、絶対次元は、相手の出方如何によつては変わらない。ただ、キリストは言われた、

「聖霊に逆らう罪は赦されない」

と。それは、イエスは聖霊さまを自分とは別個に考えておられるから。人間イエスはボロクソに言ってもいい。滅多打ちにしたって、ゆるされる。しかし、聖霊さまに逆らったら、それは永久にゆるされない。それくらいにイエスはご自分の中に宿っていらっしやる父の神の霊、聖霊を大事になさったんです。ところが、

「助け主をあなた方に送る。自分は天に、父の御許に行く。しかし、あなた方

を孤児にはしない。親なき子にはしない。必ず帰ってくる。助け主という姿  
であなた方のところへ帰ってくる。助け主を送る」

と言われた。



「父にお願いしよう。父は別に助け主を送って、あなた方と共に永久に居らしてくださいから」

と。なにかイエスは助け主を別人のようなことに言っておられる。ところが、実際はイエスが助け主となって、イエスが霊となって、我々の中に宿ってください。

### ●聖霊のバプテスマ

神の霊が宿るのに、神の霊は汚れたところ、穢れた所には宿れない。他の霊なら宿るかもしれませんが。でも、聖なる霊、これはもう全く聖き霊ですから、完全に罪なきところ、完全に「0」——小池先生が仰る「0」——そこにしか宿れない。しかし、誰も「0」になれない。小池先生も「0」になれないから苦しんだ。

「恵福なるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

と。イエスは霊が貧しい。だから、神さまは100%に宿った。

「小池は貧しくなれない。なりたくてもなれない。この自我、小池、これをどうしてくれるのか。どうすれば、主さま、あなたのように霊貧しくなれるんですか」

と。そのとき響いてきた言葉が、

「恵福なるかな、汝、わが十字架によりて既に霊貧しくされてある者よ。十字架のわれ、聖霊のわれ、汝の中にあり」

と、こう来たんです。これから霊が貧しくなるのではない。これから修行をして霊を貧しくするのではない。

「わが十字架によりて既に霊貧しくされた小池よ。復活のわれ、聖霊のわれ、汝のうちにある」

と、こう響いて来た。そこで畳の上に平伏したという。

小池先生は聖霊のバプテスマを二回受けておられる。一回は手島さんと熊本で祈った時。その時に烈しく聖霊を受けられた。これは非常にドラマチックな、人の居る目の前で起きた。手島さんが、

「ああこれは立派な聖霊のバプテスマですよ。先生から異言が出てますよ」

とか言っつて、まるで横にいた親友みたいに喜んでいた。手島さんは先に受けとられたらしいから。でも、受け方、内容、深さ、そんなのは私は知りません。でも、小池先生は初めてあの熊本で聖霊体験をなさった。それから二度目は、東京に帰ってきてからです。私は、東京に帰ってきてからの方が本当だと思っっている。熊本は序の口ですよ。あつと驚く姿で、引き上げられてドスンと落ちたという。そういう劇的な形で先生に聖霊がくだってきて、今まで味わったことのない——無教会で聖霊のことは言われないそうです、ましてや体験なんてない——先生はじかじかに天から火のバプテスマを受けて、50センチ上がってドスンと落つこちたとか、異言が迸り出て、手島先生がニコニコしながら、



「ああ、小池さん、立派な異言が出てますよ」  
なんて喜んでいたら、そういうことを私は聞いた。そういった劇的な聖霊体験と、それから今度は東京に帰られてから、静かに祈っている時に、

「さいわいなるかな、汝、わが十字架により既に霊貧しくされている者よ、復活のわれ、聖霊のわれ汝のうちに在り」

と響いてきた。畳の上に平伏したという。私はこれが本当だと思っている。初めのは入り口です。いわゆる肉体的な体験が伴って、劇的なドラマチックな形でウワーツと来た。それは突破口かもしれません。でも、本当の深い聖霊体験は、東京で畳の上で、

「幸いなるかな、汝、わが十字架により既に霊貧しくされている者よ」

と響いてきた。あの熊本での聖霊体験の時にその、

「十字架で霊貧しくされた」

とか、そんなことは何も一言も言っておられないですもの。ただ祈っていたら、ウワーツと来たんだと言う。ちょうどパウロがキリストにぶつ倒されたみたいにウワーツと来たんですね。それであれよあれよという驚きなんです。今まで無教会において味わったことのないようなことがウワーツと来たから。

ところが、東京での体験は、本当に静かな中で一人——聖書を読んでおられたのか、冥想しておられたのか知りません——その時に、

「幸いなるかな、汝、わが十字架により既に霊貧しくされている者よ」

と。これからではない。十字架はお前を片づけたんだ、十字架はもう与えているんだ、ゼロ口しているんだと。

「霊貧しくされている小池よ、復活のわれ、聖霊のわれ、汝のうちにあり」

と、こう響いてきた。そういうことを先生は告白しておられる。

それで恐らく、あの阿蘇で体験されたあとの方が、聖霊の働きは見える形で激しかったと思う。病める人が癒されるは、もう使徒行伝みたいなことがバンバン起こった。東京での体験はそれから何年かのちのことだろうと思うけれども、そのときはあまり先生は、癒しだとか何だとか、そういった奇蹟的なことを表に出されなくなりました。あいかわらず祈れば起こったんでしよう。けれども、そういうことをいちいち証しの文章に書いて、

「私を通してキリストはこんなことをやった」

とか、そんなことをもう言われなくなつた。もつと深い世界へ入っていかれた。そのように私は受けとっている。

### ●詩篇103篇を成就したのがイエス

それでこの詩篇103篇をもう一度味わっていたかと思えます。

「わが靈魂よ、エホバをほめまつれ、わが衷なるすべてのものよ、そのきよ



き名をほめまつれ。<sup>2</sup>わがたましいよ、エホバを讃まつれ、そのすべての恩恵をわするなかれ。

つまり、全身全霊で全存在をもって神を讃えろと。我々だったらキリストを讃えろと。我々は直接、神を讃えない。キリストを讃える。

「主イエスさま、ありがとうございます」

と。そのイエスの背後に神が居てくださる。だから、私は直接、「神さま、お父さま」という祈りはあまりしつくりこない。「主イエスさま、ありがとうございます」と。イエス・キリストが、どこまでも私が相對するお方なんです。そのお方が私のために死んでくださったお方、私の一切のマイナスを引き受けてくれたお方です。そして、

「我は道なり、真理なり、生命なり。我によらでは誰にても父の御許に到る者なし」

と。イエスという方が御言をもって私に迫ってください。その御言の直接の語り手、そしてご自身が霊であり生命であり給う、そのお方が私に直接ぶつかってきてくださる。そのお方を「主よ」と呼んでいるわけです。主の背後に「父なる神」が居てくださるんですよ。だから、私たちはどこまでも、

「主イエスさま、イエスさま、ありがとうございます」

と。やはりイエス・キリストさまを第一に出してほしいんです、私の個人的な願いとして。そこところは、人によっていろいろお考えが違いかもしれませんが、私はそうなんです。

詩篇103篇にもどります。この103篇で祈られた祈りをキリストは具体化してくれた。タビデの歌でしたら、キリストがお出でになる千年前です。少なくとも何百年も前のはなし。そこでダビデが示されたことをキリストは成就された。だから、その意味ではこれは預言です。霊魂が讃めるのは現在です。しかし、讃えられている内容は預言ですよ。

「<sup>3</sup>エホバはなんじがすべての不義をゆるし、汝のすべての疾をいやし<sup>4</sup>なんじの生命をほろびより贖いだし、仁慈と憐憫とを汝にこうぶらせ<sup>5</sup>なんじの口を嘉物にてあかしめたもう。斯てなんじは壯ぎて鷲のごとく新になるなり。

イザヤ書の40章以下に出てくるようなことがここに歌われています。だから、これは預言ですよ。これを具体化して成就したのがイエスさまだった。

「まことに主よ、この103篇の3節、4節、5節を成就してくださったのは、主さま、あなたでした。ありがとうございます」

と、私はそういう読み方をしています。それから、

<sup>8</sup>エホバはあわれみと恩恵にみちて怒りたもうことおそく仁慈ゆたかにましませり。<sup>9</sup>恒にせむむることをせず永遠にいかりを懐きたまわざるなり。<sup>10</sup>エホ



「バはわれらの罪の量にしたがいて我等をあしらいたまわず、本当は罪の量にしたがってあしらいたもうたんですよ、あの十誡の世界は。誰も神の前に立つことができない。本当に律法によつて裁かれるなら、誰一人として立つ者はいない。」

「罪の量にしたがいて我等をあしらいたまわず、われらの不義のかさにしたがいて報いたまわざりき。」

と。それだけでも、大変ありがたい恵みだった。しかも、

「エホバをおそるるものにエホバの賜うそのあわれみは大にして、天の地よりも高きがごとし。」

「天地の隔たりがある」とよく簡単に言いますが、天はどこまで高いんですか。無限でしょ、宇宙空間は。そのぐらい、神の思いと人の思いは異なる。

「そのわれらより愆をとおぎけたもうことは東の西より遠きがごとし。」

東はどこが起点で、西はどこが起点なのか、わかりません。そのくらいに桁違いだ、人の思いを絶しているよと、そういうことを言ってくれている。

「エホバの己をおそるる者をあわれみたまうことは父がその子をあわれむが如し。」

「本当の父ならば」ということです。世間には変な父がいっぱいおりましたね、新聞記事を見てましたら、こんなのが父かというようなのがずっといろいろある。だから、小池先生がよく訓示で、

「父母を敬え。自分が子どものときは、学校から帰ってきたら両手をついて、『お父さま、お母さま、帰ってまいりました』と、ちゃんと挨拶した。それに比べてこの頃のやつは……」

なんて言われた。

「先生待ってください。あなたのところのお父さんお母さんみたいな立派な親ばかりではありませんから。今はひどいのがいっぱいおるんですから。それを無視して、『父母を敬え』と無条件に言われたら困るんですよ」

と、私は本気でそう思いましたよ。

「先生は美しいものばかりを見ているのではないか。くだらん父親母親はいっぱいおるのではないか。いじめ、虐待、それに目を伏せたら困りますよ」

と。まあ今の方があの頃よりもっとひどい。それが世の現実です。まあそんなことをつい思ってしまうけれども。ヒルティもあの『眠られぬ夜のために』の中で、

「『父』という言葉は嫌いだ。世間の父にはろくなやつがおらん。あまり『父』という譬えを言われたら、自分はいやだ」

と言っています。

「エホバは我等のつくられし状をしり、われらの塵なることを念い給えばな」



り。15人のよわいは草のごとく、その栄は野の花のごとし。16風すぐれば失せてあとなくその生いでし処にとえど尚しらざるなり。

はかな  
儂いものだよ、人間なんてものは。昨日居たかと思うともう居らんではないか。あの人がどこへ行つたのか誰も知らん。そんな実に儂い存在だと。しかしながら、

17然はあれどエホバの憐憫はとこしえより永遠まで、エホバをおそるるもの  
にいたり、

つまり、永遠に無限に続いていくと。

その公義は子孫のまた子孫にいたらん。

義の中に愛がこもっています。それが子孫のまた子孫に末代までも続いていくと。

18その契約をまもりその訓諭を心にとめて行うものぞその人なる。

「行うものぞ」という。

「知っているだけではダメだ。行っている、実行している、そういった人たちは祝福を受ける」

というようなことを言つて、それから今度は、天の万軍に向かつて一緒に神を讃えようと言っている。

19エホバはその寶座をもろもろの天にかたく置たまえり、その政權はよろずのものの上えにあり。20エホバにつかうる使者よ、エホバの聖言のこえをきき、その聖言をおこなう勇士よ、エホバをほめまつれ。21その万軍よ、その聖旨をおこなう僕等よ、エホバをほめまつれ。22その造りたまえる万物よ、エホバの政權の下なるすべての処にてエホバをほめよ、わがたましいよエホバを

讃めまつれ。」（詩篇103）

神讚美の詩篇なんです、この103篇は。そして、その中に贖いが入っている。赦しが入っている。福音が入っている。その預言を成就したのがイエスさまだったんです。そういうふうには受けとっています。

詩篇は終わりの方にいきましたら讚美ばかりですよ。終わりの方、145篇くらいからあとはもう讚美、讚美です。だから、詩篇は始めから読んでいったら途中で息切れしますから、後ろからも読んでください。挟み打ちにして、時々真ん中をつかんでください。始め、終わり、真ん中。後ろから食べていって、それから始めをくらって、最後に真ん中のおいしいところを食べるとか、そんなふうには150篇の詩篇を読んでください。私には、詩篇は祈りの友、祈りに導いてくれる魂の響き合う、そういう人たちの叫びの集まりだと思つている。だから、『新約聖書、詩篇付き』というのは素晴らしいですね。新約聖書に詩篇をくっつけてくれている編集者はなかなかの人だなあと思う。ルターは言った、

「詩篇は小聖書である。聖書の中味は全部、詩篇の中に含まれている」と。そのくらいルターはこの詩篇を大事にした。



## ●祈りとは信入・帰入・祈入

プリントのレジユメに戻ります。

《「祈り」とは、十字架・聖霊の主キリストの中へ「信入・帰入・祈入」すること。信じ入り、帰り入り、祈り入る。これは全部、小池先生の言葉です。

「入らないとダメですよ。信じているだけではダメ。信じ入る、帰り入るんですよ。玄関たたいて「帰って来ましたよ」ではダメ。玄関をぶち破って入るんですよ。「玄関を開けてください、入りたいです」と。この「入る」というのが大事だという。祈り入ること。」

その土台は、「イエスの架かり給いし十字架」である。そこで（その所で）「旧き我」「肉なる我」は葬り去られていることを信受・体受するにあり。《

十字架で旧き我、肉なる我がもう片づけられている。これに気づいてください。自分で無になろうとか、自分で罪なき姿になろうとか、自分で修養して瞬間的には成ったってそんなものは長続きしないと、私は思います。私は始めからそんなものは諦めていきますから。そんな無駄なことはやりません。無駄な抵抗は止める。イエスさまがせつかくご自分の生命を懸けて、十字架で生命を懸けてくださったんです、

「やあ、おいでー。」

と言って。狭き門ではない。広き門。イエスぬきにしたら、狭い門かもしれません、狭き道かもしれません。入って行ける人はないでしょう。ところが、イエスは道を拓いてくださったんです。

あの子どもの讚美歌がありますね。461番「主われを愛す」。小池先生が、

「これは最高の讚美歌ですよ」

と言われた。

「主われを愛す 主は強ければ、

われ弱くとも 恐れはあらず。

わが主イエス、わが主イエス、

わが主イエス、われをあいす。」

主がわれを愛し給うんです。私が主を愛するのではない。主がわれを愛し給うと。

「わが罪のためさかえをすてて、

天よりくだり 十字架につけり。」

「みくにの門をひらきてわれを

招きたまえり、いさみて昇らん。」

招いてくださったのに、それを蹴飛ばすなんて、とんでもない。申し訳ない。

「ありがとうございます」

と言って、そのお招きに応えて入っていく。十字架で門を開いてくださった。





「いや、こんな汚れた人間は入れません  
なんて言うなど。」

「汚れない。私がお前の汚れを取り払った。お前は潔い。入って来い！」  
と、そう言っておられるのに、

「いや、私はまだ不信仰で、私はまだ汚れた者で、私は……」

と。傲慢というんです、これを。謙遜でも何でも無い。恵みの言葉を拒絶しているんですから、こんな失礼なことではないですよ。ところが、案外そういうクリスチャンが多い。

「私はまだまだです」

「いつになったらいいんですか？」

と聞きたい。

「そんなもの、百年たつてもあんたはダメですよ。ダメなことがわかっているから、  
キリストは死んでくださったんじゃないですか。もう一度、キリストを死なすん  
ですか？」

と。クリスチャンでね、そういう遠慮深そうなクリスチャンはダメですよ。「おきなな幼児の心」と  
いうのは、飛びついていくんです。

「おいだよ。あんたのためにまんじゅうお饅頭を買ってきたから、おいで」

「は〜い！」

と言って喜んで行って、二つガブツと食べて、

「あかん、あかん、お兄ちゃんのをとつたらあかん。あんたは一つだよ」

「つまらないの」

なんて。そういうかぶりつき。そういう幼児の心。あまり賢くなりすぎてあかんのです、  
現代人は。頭で考えるから。

「そんなことがあるだろうか？ 一人のひとが死んで、みんなが罪ゆるされる。そ  
んなバカなことがあるだろうか？」

と。それはよく考えたらそうですね。

「なんで、一人が死んだことによって皆が救われるのか。なんで、一人が罪を犯し  
たから皆罪びとなんですか？」

と。

「アダムが背いた。人間は全部同じだ」

といわれる。

「キリストの一人の善き行為によって皆が赦される」

と、ローマ書6章に出てきている。そんなのは本当は理屈にあわない。でも、

「神の知恵は、神の御業はそういう人間の思いを越えたことをなしておられる。あ  
りがごうございます」



と、私はそう言います。納得したから行くのではない。

「こんなやつを救ってくださった。ありがとうございます。あなたに出会ってなかったら、私はもうとうに死んでいます。行き詰まって、自殺しているかもしれない。自殺しなくても廃人になっているでしょう。それが24歳であなたが私をお救いくださったって、新しい人生が始まりました」

と。だから、いったん24歳で私は死んだ。そして新しい生命を賜った。そこからはキリストに献げる人生以外にありません。何をしようかと、そんなことは関係ない。

「ただあなたのくださった生命、これをあなたに献げて活かしてください。どんな職業であっても、その中であなたの御意を現してください。それがあなたのご栄光になってください」

と。それしかないですね。

### ●死生の転換

そういう死生の転換です。藤井武先生がよく、

「あんたは死んでますか？」

と聞かれたそうですが、十字架で死ぬんですよ。自分で勝手に死ぬのではありません。十字架で葬り去られている、それにハタと気がつくことなんです。自分で自分なんか捨てられない。捨てられない、己を惜しむ、そういうダメなやつを、

「そのままでもいいんだよ。私はお前に代わって死んだんだから。お前は既に私と一緒に十字架で死んだんだよ」

と仰る。パウロは、

「旧きは過ぎ去った。視よ、一切は新しくなりたり。これは神から出ている。

だから、神の和解を受け容れてほしい」

と、コリント書で言ってますね。

「誰でもキリストにあるならば、新しく造られたるものなり。旧きは過ぎ去った。視よ、一切は新しくなりたり。これらはすべて神より出ている。この神から提供された和解、神さまとの仲直り、これを受け容れてほしい。頼むから受け容れてほしい」

と、そう言ってます。パウロは懇願している。

「視よ、今は恵みのとき救いのとき」

と、そういう言葉も出てきます。イザヤ書の言葉です。そういう形でパウロはキリストに逆らっていた。それがひっくり返されてからは、本当に身を粉にして働きました。あのパウロの気魄、祈り、それを私たちは引き継いでいるつもりなんです、自分では。

クリスチャンというのは燃える魂ですよ。キリストが燃えておられるのに、こっちがく



すぶっていたら、そのうちに消防がきて、本当に消してしまいますからね(笑)。消防がきた時にはもう遅かった、この燃えている火を消すことはできませんと。それが御霊のクリスチャンです。御霊のクリスチャンでなければ、伝道はできないですよ。では、御霊をいただくには、どうしたらいいんですか。

「祈りなさい。十字架を土台にして祈りなさい。十字架で自分がぶっ飛ばされていく。もうお前はいない。お前は十字架で片づいている。そこへ私という聖霊が宿りたいんだ。胸の扉を叩いている。あなたが気がついて扉を開けば、私は突入するよ」

と。自分で死ぬのではない。もう十字架で死んでいるんです。

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くにあらず。復活のキリスト、聖霊のキリストがわがうちに在りて生き給うなり」

と。ガラテヤ書2章20節、21節です。

私はいつも同じことを言う。聞き飽きたでしょ、皆さん。でも、言いたい。皆さん、毎日同じご飯を食べているでしょ。

「もう、ご飯は要らん」

と言いますか。ルーチーンのように同じようなことをやりながら、それによって日々新たにされていく。我々は毎日にキリストの霊気をいただいて、毎日に十字架の死をいただいて、そして毎日に新しく生まれていく。そういうことの繰り返しではないかと思う。そして自分で、

「自分はどのくらい成長しただろうか?」

と、そんなことを測ったらダメなんです。植物を植えて、引っこ抜いて、「ああ、根っこが今日は5センチ伸びた」と、また埋めて三日たってまた引っこ抜いたら、枯れますよ。根っこは見えない。見えないけれども、伸びていつているはずだ。上が伸びれば、それだけ根っこも伸びている。木が枝を張れば、それだけ根っこも広がっている。見える世界は上の世界ですけれども、上が栄えているということは、根っこがしっかりとっていないと栄えない。根っこがしっかりとっていて、そして樹木は栄えていく。

これは小池先生が樹木の譬話をされた。宗教の世界——私は「宗教」という言葉は嫌いですけれども——神さまの世界、霊の次元の世界は人の目には見えない。神さまは御存知です、ご自分の世界だから。それは人の目には見えない。肉には見えない。けれども、厳然としてそれが根をしっかりと張っていてこそ、地上の樹木というのは、台風がこようが何がこようがびくともしない。まあ雷が落ちたら焼けるでしょうけれども。

でも、そういう、人の目には上しか見えていないけれども、上が盛んにどこまでも天に向かって伸びていくということは、地がどこまでも神さまの奥深い次元に根をおろして、そこから聖霊の生命をいただいて、上が栄えていく。人間は上ばかり見ているけれども、本



当は見えない世界が大事だということ。

「**見ゆるものは暫くであつて、見えないものは永遠に続く**」

と、第二コリントの4章にありますね。

そのように、我々は、神さまも見えない。今やイエスさまも見えない。見えないお方、しかし、イエス・キリストという方は福音書で我々の前に描きだされています。そういう福音書のイエスのお姿を想い浮かべて祈る。

### ●パウロの私への預言

これはU君を通して私に預言が与えられた時にそれが出てきたんですよ。

「福音書のイエスの場面をありありと、ぼうふつ髣髴と想いうかべながら祈りなさい。たとえば、湖の上を歩いて来られるキリスト、山で祈っておられて眩く輝かれたキリスト。そういった福音書に描かれているキリストの場面をまざまざと想いうかべながら、そのイエスさまに祈りなさい」

と、そういう預言が与えられた。あれは1976年の12月30日のことでした。大阪召団が生まれたときです。京都召団は1972年に産声をあげました。私がちょうど40歳になる歳ですからまだ39歳の時でした。それから1973年に「京都キリスト召団」と名乗らせてもらった。1976年に大阪で伝道集会をやった時に——つまり大阪召団が出来上がった年で、ちょうど『芸術のたましい』（小池辰雄著作集第2巻）が出来たとき——Uは意気盛んで喜んでやってきて、彼は後悔した。

「えらいことになってしまった。あんなもの引き受けなければよかった」

と、ブツブツ、ブツブツ、私の所に来てぼやくんですよ。

「まあまあ、ぼやくなよ。三階の室で待っていてくれよ。私は下で酒を温めて持っていくから」

と。上がってきてみたら、彼は様子がガラッと変わっている。

「あつ、パウロさんがここに居る！ ママさんがここに居る！」

と。Uはパウロさんからさんざんやられているんです。

「あんたはダメではないか。大転換を与えたのに何しているか。銭の勘定ばかりやっていて」

とか。彼にとつては小諸のママさんの所がいつも逃れの場だった。東京（武蔵野）は激しいでしょ。彼は、神学校へ行くということ（家出して）東京に行っていた。ところが、神学校へ行っていない。それでお父さんが怒って、彼を呼び戻した。彼は小池先生がかばってくれるかと思つたら、「お父さんが呼んでおられるから帰れ」と言われた。彼は裏切られたと思つて、もの凄くショックを受けたそうです。小池先生は自分を守ってくれると思つたのに、



「ああそうか、お父さんが呼んでおられるのか。お前は帰れ」

なんて。あれがもの凄いショックだったそうですね。まあ、若者というのはそういうものですね、命懸けですから。そんなことがあって、その彼がその後、伝道をやりだして、大阪召団が生まれたのが1976年。京都召団が1972年。だから、4年後でしょ。非常にドラマチックな時代だった。その大阪召団が生まれて、彼は後悔して、

「あんなものは引き受けなければよかった。変なものを引き受けしまった。もう俺はいやだ」

とか言っつて、私の所にぼやきにきた。それで、私は慰め役をやっつていて、お酒を用意して三階に上がったたら、ガラツと様子が変わっていた。パウロさんが現れた。パウロが彼を叱責している。

「お前はなんだ。けしからんじゃないか」

と、さんざんパウロさんにやられた。横で執り成しているのが川口のママさん。

「パウロさん、そんなにいじめるものではない。あの子はいい子なんだから、いじめてはダメ」

と、執り成している。それから今度は、

「あれ？ 奥田先生の後に凄い高次な霊の方が立っておられる。誰かわからない」

と。私は今は、ヨハネじゃないかなと勝手に思っている。

「凄いお方が立って話しかけたがっているけれども、先生は全く気がついてない。

だから、自分が取り次ぎます」

と言っつて、ウワーツと語ってくれた。あれは録音をとっておきたかったな。一生懸命に筆記したけれども、十分の一ほどしか書いてない。あの時に初めて、天からの預言というのはこういうものだということを私は味わせてもらった。

「祈りが足りないですね」

とまづ言われた。翌年にドイツへ行くことになっていた。

「ドイツへは研究に行くんじゃないやしませんよ。ドイツで祈ってきなさい」

と、その時にハッキリ言われた。それがずつとドイツ滞在中、私から離れなかった。まあそれがあつたのと、それから本当にためになる、私に対するこれから伝道をやっていくときの大事な心得をお話しくださいました。

「集会を始める時に一人びとりの目を見なさい。目を見ながら挨拶しなさい。その時、『イエスキさま、イエスキさま』と呼びながら、みんなの目を見なさい」

と言われた。つまり、

「二人びとりに宿っているイエスキさまに挨拶しなさい。そうやれば必ずそこに御業が現れるから」

と。そういう預言でした。私はだいたい、そういう霊的体験が全くなく来たんですから、



あれがもの凄く私にとつては励ましに、サポートになりました。ドイツへ行つてからもずっと。まあそんなことを想う。

讃美歌461番からそんなお話になってしまいました。

「みくにの門かどを ひらきてわれを

招きたまえり、 いさみて昇らん。」

「わが君イエスよ、 われをきよめて

よきはたらきを なさしめたまえ。」

こういう讃美歌はみなキリストが主役です。「主われを愛す」でしょ。「われ主を愛す」ではない。

「わが主イエス、 わが主イエス、

わが主イエス、 われをあいす。」

と。三回、「わが主イエス」と。そのお方が私を愛してくださっている。私はその愛にお応えするだけだと。

### ●祈りの土台はイエスの十字架

プリントに戻ってください。

《「祈り」とは、十字架・聖霊の主キリストの中へ「信入・帰入・祈入」すること。

その土台は、「イエスの架かり給いし十字架」である。

十字架ぬきの祈りというのは、どこへ行くかわかりません。霊的現象は起きるでしょう、きつと。霊力的なものが働きますから。しかし、その霊力がキリストから来ているのか、他の霊から来ているのか、これは人にはわかりません。現象はいろいろ起こるんですけどね。だから、現象に惑わされてはならない。

十字架で旧き我は、つまり肉なる我、生まれながらの我、これはもう十字架で片

づけられている。

「汝、既に潔し。わが語りたる言ことばによりてなり」

と、キリストは弟子に言われた。御言みことば自体で潔まっている。その上に止めとどめをさすように、十字架で根底的に我々の旧き我、肉なる我をもうぶつ飛ばした。ゼロにした。そこへ聖霊が降つてこなかったら大変なんですよ。潔められたところに悪霊が来たら、それはもつと前よりひどくなる。だから、きれいに掃除されたところへ早く聖霊に来てもらわないと。「十字架と聖霊はワンセットですよ」ということ。十字架でゼロにされたところへ必ず聖霊さまが来てくださる。十字架・聖霊はワンセット。だから、「十」を描いて、それを「○」で包んでいる、そういう姿です。

祈りの土台は、「イエスの架かり給いし十字架」である。その所で「旧き我」「肉なる我」は葬り去られていることを信受・体受するにあり。まさに、ガラテヤ書



2章20節〜21節を、自らの告白とすることである。《それをご自身の、皆さんお一人お一人の告白にしてください。パウロはそう言ったが、私は別です》  
「私も同じです」  
「なんて、そんなことはあかん。」

と。パウロさんと同じ次元、それをいただかないと、パウロは嘆きますよ。

「パウロは特別だ」

と、そんなことは言わないで。パウロは、

「我は罪びとの首なり」

と、ハッキリ言ったでしょ。

それから次は、

《地上でのイエスの霊願…「此の火すでに燃えたらんには！」（ルカ12・49〜53）》

「49我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。50されど我には受くべき（血の）バプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。51われ地に平和を与えんために来ると思うか。われ汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。52今より後、一家に五人あらば三人は二人に、二人は三人に分れ争わん。53父は子に、子は父に、

母は娘に、娘は母に、姑は嫁に、嫁は姑に分れ争わん」（ルカ12・49〜53）

これを恐れてはダメですよ。クリスチャンファミリーならいい。そうでない家庭に生まれた方がクリスチャンになったら、必ずこれが起こるんです。そこが宗教的に熱心な家庭であればあるほどね。

サンダー・シングがそれだった。彼は仏門の生まれです。そして非常に期待されていた。お母さんがもの凄いの祈りの人だった。その亡くなったお母さんの祈りを受けて育ったのがサンダー・シングで、エリートだったんです、その宗教のそちらの道での。それがキリストを受けてガラッと変わったから、毒を盛られて毒殺されようとした。それを助けられて、本当のキリストの伝道者として彼は生涯を献げていった。最期はチベットかどこかで行方がわからなくなったという。彼は20世紀始めの人で、日本へも来られたそうです、1919年に。そういう異教の地に、異邦人の世界にキリストの生命が燃える。キリストの生命が芽生えていくと必ずそういう争いが起こります。それを嫌がっていたらダメなんです。だから、

「われ地に平和を与えんために来ると思うか。われ汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり」

とハッキリ言っておられるでしょ。平和の君といわれているキリストがわざわざ争いを起こしにきた。それは本当に救いあげるためなんです。本当の世界に入れるために突き抜けなければならぬ、そういう手術なんです。これを避けたらダメです。そういうことをキ



リストはここで言うてくださっている。

その次、

《「求めよ、さらば与えられん」の「求め」の内容は、「聖霊」である（ルカ11・9）

13)

「まして、**求むる者に善きものを賜らざらんや**」

と。「善きもの」は聖霊であると、ルカ伝ではハッキリ書かれている。》

### ●イエスは祈りの人

それから次は、

《地上でのイエスは、「祈り」の人であった。》

これは小池先生がいつも言うておられた、

「イエスは如何なる人かと聞かれたら、私は躊躇なく答える、イエスは祈りの人であった」

と。祈りが原動力となつていろんな御業が起こつていった。十二弟子を選ばれる時には徹夜で祈つておられる。マルコ伝の1章35節。その前に、いろんな奇蹟の御業を行つておられる。悪鬼に憑かれた者を癒したりとか。

「32夕となり、日いりてのち、人々すべての病ある者・悪鬼に憑かれたる者をイエスに連れ来り、<sup>33</sup>全町こぞりて門に集る。<sup>34</sup>イエスさまざまの病を患う多くの人をいやし、多くの悪鬼を逐いだし、之に物言うことを免し給わず、悪鬼イエスを知るに因りてなり。」

もの凄いエネルギーが、霊的エネルギーが要つたんだと思う。その霊的エネルギーを使い果たしたイエスは今度は充電しないといけない。充電の仕方は——十時間眠るのか、とんでもなかった——イエスは、

「**朝まだき暗き程に、イエス起き出でて、寂しき処にゆき、（独り）其処にて祈りいたもう**」（マルコ1・35）

と。「ひとり」とは書いてませんが、おひとりで。こういうイエス、こういうお姿、これに私はやはり打たれますね。なにも宗教的天才とか、そんなのではない。イエスは本当に祈りのひとだった。

「自分は何もできない。自分はただ父の御意がこの身を通して成つていくことだけを求めていく」

と、それを貫かれたお方であつたということが、こういったことでもわかります。

それから、ルカ伝の11章では弟子たちが、

「先生、ヨハネは弟子たちに祈りを教えました。先生、どうぞ、私たちにもあなただけに祈りを教えてください」





とって、お願いした場面です。その場面がどういう場面かということ。11章1節。どういう場面ですか。

「イエス或る処にて祈り居給いしが、その終りしとき、弟子の一人言う「主よ、祈ることを我らに教え給え」（ルカ11：1）」

「その終わりしとき」と。弟子たちはイエスの祈りが終わるのを、今か今かと待っていた。お尋ねしたいことがあるから。弟子たちは一緒に祈っていたのではない。イエスがひとりですべて祈っておられた。やっと終わった。それで、

「さあ待つてました。先生、お尋ねしたいことがあります。あのヨハネは弟子たちに祈りのことを教えている。先生は今まで私たちに教えてくださいませんでした。だから、どうぞ、お願いします。私たちにも教えてください」と

という場面でしょ。

「ある処にて祈り居給いしが、その終りしとき、弟子の一人言う「主よ、ヨハネがその弟子に教えたように、祈ることを私たちにも教えてください」と。

### ●「主の祈り」

そして仰つたのがあの「主の祈り」です。その簡潔版ですよ。マタイ伝の「主の祈り」は非常に整っています。このルカ伝はその源、原型はこれだったと思う。最も根本的な事を簡潔に口頭で仰つた。

「<sup>2</sup>イエス言い給う『なんじら祈るときに斯く言え「父よ、願くは御名の崇められん事を。御国の来らん事を。」』

神さまに関してはこの二つです。マタイ伝は非常に整った祈りです。それに対してルカ伝は——とつきにお答えになつていらっしゃるでしょうから——いちばん大事なことは、

「まず御名を崇めさせて下さい。あなたの御名が聖として崇められますように」これがひとつ。それから、

「御国を来たらせてください」

と。御国というのは神の御意が100%に貫かれている場をいいます。地上の王国ではありません。そういう霊の支配しているところ、神の霊が支配しているところ、それを地上に來たらせてください。天には成っています。それをどうぞ地にも成らしてください。というならば、私はそのためにやつて来たんだよと。

「時は満ちた。神の国は近づいた。」

神の国はキリスト自身が神の国ですから。

あなたは心を翻して、私を受けろ」

と。「福音を受けろ」というのは、「私を受けとれ」ということ。



「御国の来たらんことを」

と。それから、もうその次は、

3 我らの日用の糧を日毎に与え給え。

「今日のご飯をください」と。涙ぐましいでしょ。

「神さまのことは二つだけ祈ったらそれでいい。もうすぐ次はご飯のことを祈れ」という。

「御名が崇められ、御国が来たらんことを」

というのを見えない世界ですわ。「御名が崇められる」とはどんなことかわかりません。「御国を来たらせる」とは、いつくるかわかりません。そういうのに対して、

「ご飯をくれ」

とは今日の今のこと。だから、我々にとりましたら、そこにいちばん力がこもっている。

「パンをくれ、ご飯をくれ、お父ちゃん。まあ御国のことはあなたに任せておきます。

御名を崇める。まあ当然でしょうね、崇めますよ。でも、パンは我々にとつていちばん大事なことです、ちょうだいよ」

と、そんな感じですね、ここを見てますと。デイリーブレッド、日毎の糧です。

その次は、ゆるしです。

4 我らの負債ある凡ての者を我ら免せば、我らの罪をも免し給え。

これは、

「まず私たちの罪を赦してください。そしたら、私に対して負い目のある者をゆる

しますから」

ではないんです。

「まず、ゆるせ。お前がゆるすなら、私も赦してやるよ」

と。これは大変ですよ。

「あんな憎いやつをゆるすんですか！」

「そうだよ、ゆるすんだ。そうしたら、お前の罪も、マイナスも全部ゆるすから」

と。あの憎いやつの罪、人間に対する罪かもしれない。けれども、我らの負い目というのは、神さまに対する背き、罪でしょうね。

「我等の罪を赦したまえ」

と。それから、

我らを嘗試にあわせ給うな」（ルカ11・2〜4）

「試みにあわせないでください」

と。人間は試みに弱いですからね。種蒔きの譬話のように、始めはスクスク育ってきてても、茨が生えてきて、いろんなものが——富の誘い、家計の苦勞、家族の問題、就職の問題、子どもの、嫁さんのお世話——まあいろんなものがやってくるでしょ。最後は介護ですね、



この頃は。そんなことがやってくると、もう神の国はどこかへふっ飛んでしまう。それが試みです。それに遭わせないでくださいと。

「耐え難き試みには遭わせ給わない。試練と共に必ず逃れの道を備え給う」（コ

リント前10・13）

と、ちゃんとコリント前書10章に出てきましたね。

### ● 求めの切なるによりて

それから、友だちの例をひいて、

「遠方から友だちがやって来たので、差し上げるパンも何もないので、頼むからあなたのパンを貸してよ」

と言って、隣へ行ってトントンと叩いた。

「面倒だから、やめくてれ。もう俺たちは寝ているんだから。うるさいがな」

と。友だちだからということでも、あかんかったという。でも、

「執拗しつように願う。相手が根負けするまで執拗に願う。それに免じてくれるよ」

と言っている。クリスチャンだから聞いてくれるのではない。求めが切せつだから聞いてくれる。クリスチャンかどうかではない。求めの切なるによりて。そう受けとりたいですね。友だちだからといっては聞いてくれないけれども、求めが切である。クリスチャンがどうかは関係ない。

「求めの切なるによりて、必要なものを全部与える。だから、あなた方もそのようにとことん求め続けなさい」

と。熱心に求めて与えられたものは大事にする。簡単にいただいたものは、簡単に捨ててしまう。そうかもしれませんね。

「求めよ、されば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん」

云々とあつて、そして、

「あなた方は悪いやつでも、子どもにはいいことをしてやりたい。これが世の常だ。世の父親の常だ。まして天の父は、求める者に聖霊を賜わさらんや」

と。まだ十字架以前ですよ。でも、聖霊の約束をしてくださいました。それが十字架で我々の罪を全部片づけて「0ゼロ」にしてくださいました。「0」を賜った。その「0」の中に聖霊という「100」が宿るんです。キリストはもう始めっから「0」なんです。

「われ自ら何ごとくをも為しあたわず」

と。「0」なんです。だから、神さまが100%宿った。

「私を見た者は父を見た」

と、正直に言っておられる。それがユダヤ人は氣にくわん。



「己を神と等しくした、けしからん。安息日に人を癒した、けしからん」  
なんて言うでしょ。安息日は人間が神さまに頼る日なんです。自分の業をやめて、

「主よ、ひたすらあなたからの恵みをいただきたい」

と。日頃は自分の力で、「自分で、自分で、自分で」とやっています。けれども、安息日は人間の業を一切やめて、ひたすらあなたから流れてくる愛、生命、御霊を受ける日です。その御霊の主が働いて、どんどん人を癒して行かれる。何がわるいのかと。ところが、彼らは、

「けしからん。まず、己を神と等しくした。神を冒瀆する罪。そして安息日を破った。けしからん罪だ」

と。しかも、安息日を破るのは、外に表れます。心の中で何を思っても、それはわからな  
いでしょ。でも、安息日を破るのは、「あいつ歩いておるわ」と直ぐわかる。安息日に歩い  
ていい距離は、なにか880メートルかまでは許されていたらしい。使徒行伝に、

「弟子たちは安息日に許される距離の所で祈っていた」（行伝1・12）

と書いてますね。そうやって、安息日を破っているか破っていないかは、心の問題ではない。  
外に表れるんです。病を癒すことも、

「やつ、あいつ安息日を破りおった。さあ、やっつけろ！」

といって、ユダヤ人たちはもう鬼の首をとったみたい喜んで。まあ本当に情けないこと  
ですけども。「求め」のところはそういうことですね。それから、さっきの、

「朝まだき暗きほどにイエス起きいでて祈り給う」

と。それから、祈っておられる所に弟子がやってきて、「祈りを教えてください」と。

### ●気落ちせずして常に祈る

《祈りの秘訣

①気落ち（落胆）せずして常に祈るべきこと。（ルカ18・1〜8）》

これは先生の『祈りの本質』（1962/7/14に京都での聖書講筈、1994/5/7刊）というところに確か、  
非常に書いておられた。簡単にも祈れる。同時に執拗にも祈る。両方大事だと。イエスは  
矛盾したことを仰る。

「異邦人は、くどくど長々と祈れば聞いてもらえらると思う。そうじゃない。お  
前たちは簡潔に祈れ。なんとすれば、天の父は祈る前からお前たちの必要な  
ものを全部ご存知だ。だからこう祈れ」

と、あの「主の祈り」を与えられた。つまり、「くどくど祈るな」と片一方では言っておら  
れる。ところが、ルカ伝18章にきましたら、

「あの不義なる裁判人でも寡婦の執拗な訴えに対しては根負けして、もううる  
さいから聞いてやろうということになる。あの不義なる裁判人ですら、あの



寡婦の訴えには根負けした。ましてや、日夜御国を求める神の民のために裁きを賜<sup>たまわ</sup>らないことがありえようか」

と、あそこで書いておられる。ルカ伝18章1〜8節がああの不義なる裁判人の話です。

### ●砕けの心

それから、同じくルカ伝18章9〜14節。この18章は祈りのことがずつとまとめられている。まず始めはその不義なる裁判人のお話。それから二番目は——これも大事なことです——パリサイ人の祈りと取税人の祈り。この二つのパターンです。パリサイ人は、

「己を義と信じ、他人を軽しむる者ども」

そういうのがゴロゴロいた。

「俺はただしい、あいつらはけしからん」

と言って、自己義認をして他人を裁いている、そういうご連中を相手にして次のような譬えをなされた。

「9 また己を義と信じ、他人を軽しむる者どもに此の譬<sup>たとえ</sup>を言いたもう、<sup>10</sup> 『二

人のもの祈らんとて宮にのぼる、一人はパリサイ人<sup>びと</sup>、ひとりは取税人なり。

11 パリサイ人、たちて心の中に斯<sup>か</sup>く祈る。

パリサイ人の祈りは立派ですよ。今でもこんな立派な祈りをするクリスチャンがたくさんおられるかもしれません。

「私は罪ゆるされたことを感謝いたします。私は毎月十分の一の献金していることを感謝します」

と、そんな模範的なクリスチャンが教会にゴロゴロしているかもしれません。けれども、イエスはそんなことは全然喜ばれない。

11 パリサイ人、たちて心の中に斯<sup>か</sup>く祈る

心の中だから人にはわからない。けれども、神さまにはわかっている。

「神よ、我はほかの人の、強奪<sup>うばい</sup>・不義・姦淫するが如き者ならず、又この取税

人の如くならぬを感謝す。<sup>12</sup> 我は一週<sup>ひとまわり</sup>のうちに二度断食し、凡て得るもの

十分の一を献ぐ」

いきなり「神よ」と言った。偉そうにね、「神よ」と。

「私はそこらにおる連中とはものがちがうんです、質がちがうんですわ」

と。だいたい私は補って言ってますよ。そこらの連中というのはどんなやつ？「強奪・不義・姦淫」。これは刑法的にもけしからんことでしょうね。

「そういうご連中とは私はわけがちがうんです。レベルが違います。それから、そこにおる取税人、ああいう虫けらとも違うんです」



「この取税人の如くならぬを感謝す」

と。取税人とはどんな中味かということは全然書いてない。もう一方は、強奪とか不義とか姦淫という、いかにもけしからんご連中だから、「そういうものと一緒でなくてよかつたね」で済みますけれども、

「そこにおける取税人とは質が違うんです。人種が違うんです。そのことを私は感謝いたします」

と。それで、その私は何をしているか。

「週に二度も断食しています。十分の一の献金を立派に献げています」

と、胸を張って堂々たる祈りをした。

ところが、取税人は鳥居とりいの外なんですよ、鳥居の中にも入れない。

「<sup>13</sup>然るに取税人は遙かに立ちて、目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言

う「神よ、罪人つみびとなる我を憫あわれみたまえ」

「はるかかあなたに立ちて、目を天に向けることもしないで、胸を打ちながら『神さま、この罪びとなる私をあわれんでください』」

と、たつたそれだけ。それに対してイエスは、

<sup>14</sup>われ汝らに告ぐ、この人は、かの人よりも義とせられて、己が家に下り往けり。おおよそ己を高うする者は卑ひくうせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり』(ルカ18・9〜14)

「あなた方に言いたいんだけど、この取税人、この人こそが神さまに喜ばれて、お前のこと好きやねんと言つて、神さまが抱きとられた。ところが、このパリサイ人、誇り高きやつはいやだ、己を高しとするやつはいやだと、神さまは拒絶しておられるんだよ」

と。「神よ、罪人なる我を憫みたまえ」と言つたこの人は、あの立派なパリサイ人よりも義とせられて、神さまの御意になつて、心安らかに家にくだつて行つた。だから、

「おおよそ己を高うする者は低くせられ、謙る者、己を低くする者は神さまが

高くしてくださる」

と。これを私は、

《②砕けの心(ルカ18・9〜14)》

と書いたんです。小池先生は、「人類を二つに分かつもの」ということをお書きになつて、

「信仰のあるなしではありませんよ。その人の心が神の前に砕けているか、砕けてないか、この二つで決まるんだ」

ということをお書きになっておられる。砕けの魂は、十字架の片一方の盗賊ですね。もう片一方はさんざんイエスを罵ののしつていた。それに対してもう片一方は、

「私はさんざん悪い事をしてきました。私が十字架にかけられてこんな目にあうの



は当たり前、自業自得です。でも、あなたはちがいます。こんな素晴らしいお方のそばで、この世の私の最後の日を過ごすのは——今日処刑されて死ぬから——ありがたいございます。これで私はもう充分満足です。十字架は自分には当然のことです。蒔いた種を刈り取るだけのこと、自業自得、当たり前です。でも、あなたは違います。しかし、どういうご縁かしりませんが、こんな十字架の所であなたとお隣同士になった。これも何かのご縁です。あなたが御国に入られる時に、あいつがおつたと覚えてください」

「**汝、今日、われと共にパラダイスなり**」

と。これが福音だと。小池先生は、

「自分の墓にはこれを書いてくれ。『汝、今日、我と共にパラダイス』この言葉を書いてほしい」

と、そういうことを仰いました。それが砕けの心ということ。

### ●まず神の国と神の義を

それから3番目。

《③「まず、神の国と神の義を！」(マタイ6・33、ルカ12・31〜32)》

人間はまず自分のことを求めます。おのれ己第一なんです。ところが、キリストは違う。

「**まず、神の国と神の義を求めよ**」

と。神の国と神の義はキリストの中にありますから。だから、我々からしたら、

「まず、主さま、あなたご自身です。あなたをいただいて、あなたと一つにされたときに、あなたは私の家族のことも、あらゆることを全部あなたは引き受けて下さっているお方です。だから、私はあなたを求めます。あなたと一緒に居ることを求めます。あなたの中に宿らせていただきます。そこから先のことは全部あなたにお委ねいたします。何が私にとって私の家族にベストか、あなたがいちばん御存知です。私が自分の願望で、これをしてくれあれをしてくれと、そんなことは申しません。あなたは最善をなし給う。どうぞ、みこころ御意通りになさって下さい」

これが我々の祈りではないでしょうか。

「**我々はいかに祈るべきかを知らざれども、御霊みたま自ら言い難き呻きをもて執り**

**成し給う**」

と。そして、

「**神は御霊の思いを知り給う**」

と。あのローマ書8章の後半部にさしかかるところですね。

「**まず、神の国と神の義を**」



と。我々は、

「まず、イエスさまを」

ということ。

「主さま、まずあなたに全托します。あなたが良しとご判断なさるようになさって  
ください。御手に委ねます」

と。全託、すべてを託する。

● 汝ら我に居りわが言汝らに居らば

それから次、4番目。

《④》「汝ら我に居り、わが言汝らに居らば、何にても望みに随いて求めよ、さら

ば成らん。」（ヨハネ15・7）

これは小池先生の讃美歌A10の「汝れわがうちに」でしょ。

「汝れ我が衷にしかと宿りて

祈り求めよ さらば成るべし」

「み父のわれを愛する如く

汝を愛す わが愛に居れ」

そう呼びかけていただいたら、

「はい、キリストのために生命を賭けて、今度は人を愛します」

と。キリストは我々を愛してくださった。我々のためにすべてをしてくださった。今度は、私たちがイエスさまに対するお返しは何か。

「人を愛せよ。人を救いあげろ。お前の生命を人にわかち与えろ。お前が生命のパンとなれ。お前は私というパンをくらえ。そうしたら今度は、お前がそのパン、生命を人々にわかち与えろ」

と。そういうことなんですね。

「キリストのため生命を賭けて

ひとを愛せん み霊は助く」

そして、「お前は愛だよ」と

「汝れは愛なり愛の炎ぞ

聖霊の愛を 貫き生きよ」

と。人間から出る愛というのは限られています。相手によって左右されます。今日燃えているかとおもうと、明日は消えているかもしれない。人間の思いから出る愛というのは非常に頼りないものです。しかし、御霊の愛は消えない。御霊の火は消えない。そういうことで、「聖霊の愛を貫き生きよ」と。だから、

《④》「汝ら我に居り、わが言汝らに居らば、何にても望みに随いて求めよ、さら





ば成らん。」（ヨハネ15・7）と。

●祈りて願う事は既に得たりと信ぜよ

それから次、5番目。

《⑤》「凡て祈りて願う事は、すでに得たりと信ぜよ、さらば得べし。」（マルコ11・24）  
ここが人間の判断と全く違うところなんです。学問の世界は、実験してデータが証明したら、そこから初めて発表する。福音の世界は、まだ事が成っていない。

「御言はかく言っている。御言は必ず成ります。だから、それに生命を預けます。  
そうしたら、その通り成っていく」

という。学問の世界は、実験して確かめて、間違いないとなったら初めて発表して、これは真理ですと言う。信仰の世界は、

「御言なるがゆえに委ねていく。そしたら、その事実が次々と起こってくる。委ねなかつたら何も起こらない」

と。全く違いますからね。しかも、学問の世界は、

「疑ってかかれ」

でしょ。だから、大学生に福音を伝えるのは大変なんですよ。

「学問するなら、疑ってかかれ。何も勝手に信じてはいかん。実験で確かめろ。歴史で確かめろ」

なんて言う。福音の方にきたら、

「まず、信じなさい」

と。全然あべこべなんですよ、発想が。そういう所に私は居った。賢い卵、やがて将来研究者になるような卵たち、それから偉い先生方、その中に私は居ったんですから。それでこの福音を告白する。それは並大抵ではありませんよ、本当のところ。

●ドイツ語の先生は幸せ

ついでに言いますと、小池先生というのは幸せな人ですよ。ドイツ語の先生でしょ。学生なんてドイツ語は何もわからない。「アー・ベー・ツェー」(abc)から始める。何も先生は勉強せんでもいい。言いたい放題言っていたら、それで授業は成り立つ。私の方はそうはいきません。司法試験に合格させなくてははいかん。そういうところに居る人間と、小池先生みたいに言いたい放題勝手にやっていたら、もうそれで成り立っていく。いや、もううらやましかつたですね。そんな人を羨むうらやことはやめましょう。

でも、その違いだけは知っていてほしい。どれだけこっちは苦勞したか。先生は苦勞してないわ、そういう面では。それは先生の学識、学力は、学生とは天と地の差です。そん



なもの眠っていても出来るんですよ、先生は。

だから、夏休み、冬休みは伝道旅行ばかりやっている。月給もらっているんですよ、ちゃんと。月給は、「夏休みでも勉強しろ」ということでもらっている。ところが、「伝道しろ」ということでは、もらっていない。神学校の教授なら別かもしれないけれども、伝道旅行は。でも、大学の先生はそんなはずではないのに、先生は平気な顔して、あっちこっち伝道旅行をやっている。まあそういう古き良き時代でした。今はそんなことは許されなくて、うね、多分。まあまあ羨ましがらな、お前は法学部でお気の毒さんでしたと。いやあ、先生はもうちよつと法学部を大事にしてほしかったなあ。

「法というのは、水は高きから低きへ流れる。これが法だ。もつと民法の学者は法哲学をやらんといかん」  
なんて。

「そんなことを言われたって、それですまないですよ」

と。私は『債権総論』の本を差し上げたら先生から、

「チンプンカンプンです」

という返事がきた。

「聖霊にあつたら、何でも解る<sup>わか</sup>」

と、それまで言っておられた。ところが、やっぱり民法はあかんという。小池先生は素晴らしいと私は思うけれども、あまりにも他人の領域に入りすぎた。自分がオールマイティみたいな発言に聞こえた。それだけの本当に聖霊の確信を持っておられたから、それは素晴らしいけれども、もうちよつと自己抑制をして、他人の領域をよいしょしてもらえたら、もつともつと信者が増えたと思いますね、今になったら(笑)。先生、どうですか？ 笑い話ですけどもね。

### ● 神の次元とこの世の論理の違い

我々の地上の世界は、事実を確かめてからしか動きだせない。神の世界は、まず御言に賭けて動きだす。それが根本的にちがう。我々の世界は、実験して確かめて、それでやつと薬でも製品でも全部、世に出すんですよ、安全審査をやつて大丈夫となつてから。それでも事故が起こる。ところが、福音の世界は、

「まず信じなさい。まず食いついてきなさい。まず生命を賭けてきなさい。キリス

トは生命を賭けられたんだから」

と。天地万物の創造主であり給う、その神の生命をいただき、我々の前にいてくださるましまです。その方に無条件に自分を託していく。これが信というものでしょ。

「あなたは見たから信じたのか。見ないで信じる者はさいわいだ」

と、トマスに言われましたね、復活のキリストが。弟子たちに現れた時に、彼だけがその



場に居合わせなかった。トマスは言いました、

「お前たちのような人間と違うんだ、俺は疑い深いんだ。脇腹に手を差し入れ、手の傷跡を触らないと、俺は信じない」

と。そうしたら、一週間後にパツとキリストが現れて、

「さあ、脇腹に手を入れてごらん、手にあなたの指を差し込んでごらん」

と。全部言い当てられたんですね、一週間前にしゃべったことを。トマスは、

「もう勘弁してください!」

と。ヨハネ伝に出てきているでしょ。だから、我々の経験則で動いていく、実験で確かめでものごとを進めていくというこの世の論理と、

「見ずして信じていく」

という神さまの次元と全く違うということをご心得てください。両方わきまえてないとダメです。この世的にものごとを判断していくときにはこの世の論理で判断する。しかし、こと神さまの次元のことを判断するときには、この世の論理なんか捨て去って、御言に委ねます。百卒長は、

「御言を下さい。そうしたら、僕は癒えます。私には部下がおります。来い!

と言えど必ず来ます。行け!と行ったら必ず行きます。私は背後にローマ皇帝の権威をいただいている百人隊長にすぎません。けれども、そのバックにいるのはローマ皇帝です。だから、言葉通りに部下は動きます。イエスさま、あなたは神の権威を持ったお方。だから、あなたが御言を下されば充分なんです」

と。イエスは、

「僕を癒してあげよう。一緒に行こう」

と言われた。でも、百卒長は、

「いえ、それには及びません。御言だけで充分です」

と。それでイエスは驚かれたと書いてます。

「いまだかつてイスラエルでこんな素晴らしい信仰は見たことがない」

「天国の饗宴に招かれるとき、そういう異邦人たちがどんどん呼ばれて、ユダ

ヤ人たちは宴会の外で嘆き齒齧みするだろう」

なんて、イエスは言われました。イエスという方は本当に偏見のない方ですよ、正直にものを見ておられる。そんなことを思います。

● 祈りたることは既に聴かれたとせよ

次は6番目。今の4番、5番を受けてきまして、

⑥ 「我らが神に向いて確信する所は是なり。即ち御意にかなう事を求めば、必ず



聴き給う。かく求むるところ、何事にても聴き給うと知れば、求めし願いを得たる事をも知るなり。」(ヨハネ第一書5・14〜15)《

「求めて必ず聴き給う」ということを本当に受けとつたら、求めたことはもう叶えられたと、具体的な事実が現れていなくても、

「祈りたることは既に叶えられたり」

とする。そこがさつき言いましたように、事が起こってから初めて納得する学問の世界、あるいはこの世の論理と、

「見ずして信する者はさいわいなり」

という、御言に生命を賭けていく世界と全く違う論理が働いているということ。これを<sup>わきま</sup>棄えていただきたい。使い分けてほしいんです。

やたらと奇蹟に頼つてはいけません。病気になるなら、お医者にかかってください。お医者さんが居らん時には、祈つて癒していただくしかしょうがないでしょうけれども。ちゃんと立派な医療施設があるなら、まずそこへ連れて行って、そのかたわら祈っておられたらいいと思う。ところが、私が出会ってきた熱心な伝道者だとか、そういう人は、

「医者に行くということは神さまを信じていないんだ」と、こういう言い方をすると、

「私は癒すものだ」

とキリストは言われる。モーセに神が語られて、

「我は癒す者なり」

という。そうしたら、

「医者にかかるというのは神を信用していないんだ」

と、そういう言い方をする。だから、もうこっちはつらいんですよ。

「病院に行つたらいいかん」

と言うんでしょ。ところが、本当はそうじゃない。お医者さんのところへ行つて、お医者さんが正しい判断をして、今の最善の治療をしてくださるように、

「どうぞ、主さま、お医者さんを導いて、あなたが最善をなしてください」

と祈る。私はそのように思う。今は癒しのことを言いましたが、

「知恵、知識、学校なんか要らん。神さまが直接教えてくれる。学校なんか行かん  
でよろしい」

そんなことは今は誰も言いませんね。そうでしょ。

「聖霊がすべてのことを教えてくださると書いてあるから、学校なんか行かん  
でい」

と。私が所属していたスウェーデンの女性の宣教師は、そう言っていました。

「学校なんか行かんがいい。全部、聖書に書いてあります」



と。その方はもう女学校の時からすぐ伝道者の道を志して、純粹そのものですけれども、そんなものが通用するとは私は思わない。だから、

「こんな方に導かれたら不幸だ。もつと健全な、社会において通用する力ある本当の福音を私は伝えたい」

と。それでそこを離れたんです。そして小池先生に出会った。まあ私もそれなりのいろいろな経歴を若い頃したんですよ、そうやって。フィンランド系の宣教師、スウェーデン系の宣教師——オレブロ・ミッシェン（スウェーデンの「福音的な自由教会」の前身）とかいう——純粹ですよ、そこから来ている宣教師たちは。でも、狭い。パウロがさかんに、

「叡智をいただきなさい」

と、祈りで言っているでしょ。

「あなた方の信仰が知恵と理解力で深められていくように」

そういうことを、エペソ書でもコロサイ書でもパウロは祈ってくれています。

「ただ信じてたらいいいのではない。もつともつと高い次元、深い次元に分け入って行きなさい」

と。聖霊の世界はどこまで行っても深いですよ。しかもそれは、平伏して平伏して行かないと。「俺は大したものになった」と、これは傲慢。これはもうサタンですから。だから、どこまでも深く深く、神・キリスト・聖霊の世界に分け入りながら、自分はどこまでも平伏して行く。これが我々に求められていることなんです。

「我らが神に向いて確信する所は是なり。即ち御意みこころにかなう事を求めば、必ず聴き給う。かく求むるところ、何事にても聴き給うと知れば、求めし願いを得たる事をも知るなり。」

ということ。

「願ったことは叶えられたりとせよ」

「はい、ありがとうございます」

と。小池先生は言われました、

「いつそれが具体的に見える形で現れるか。これは誰もわからない。祈りたることは必ずみな聴き届けられている。それがどういう形で現に答えとなつて現れてくるか、これは誰もわからない。すぐに現れることもあれば、何年ものちに現れるかもしれない。そんなことはもう神さまに委ねきろう、キリストの方におあずけしよう。こうしてくれなければ困りますなんて、駄々をこねてはいかん。全託するというのはそういうことだ」

と。

「祈りたることは既に聴かれたとせよ」

「はい、ありがとうございます」



と。それがどういう形で見えるところで現れてくるか。そんなことはこつちの問題ではない。「主さま、あなたがいいようになさってください。我々は既に地上を突き抜けたところであなたに触れ合っているんですから」と。それが、「己を捨ててかかれ」ということ。

「己を救わんと思う者は己を失い、わがため福音のために己を捨ててかかる者は本当の生命の世界に入る」

というのは、私はそういうことだと思う。

### ● 祈り

主さま、

「この火既に燃えたらんには我また何をか望まん」

と、あなたは仰いました。

主さま、聖霊の火となつてこの場を燃やしてください。一人びとりを燃やしてください。あなたの火だけが世の中を変えて行きます。どうぞ、本当に召団が燃える召団となつて、御霊の召団となつて、十字架道を貫ける本当のキリスト道を貫くことができますように、一人びとりに火となつて降ってください。火となつて燃えてください。お願いいたします。どうぞ、主さま、まだまだ明日もあります。また、それぞれの所に帰つてから戦いがあります。どうぞ、あなたが先頭を切つて進んでくださいますように、お願いいたします。

主イエス・キリストさまの御名を通し、この讚美と感謝を今、御前にお捧げいたします。アーメン

